

東日本大震災と相談支援の記録

宮城県ケアマネジャー協会事務局長

宮城県社会福祉士会副会長 小湊 純一。

東日本大震災（大津波）の時、ケアマネジャーや地域包括支援センターはどういう状況だったのか。相談支援の専門職である、宮城県ケアマネジャー協会、宮城県社会福祉士会は何をしていたのか。津波の被災地に行き茫然となり、何かをしなければという思いで活動していたものの、被災された方々の状況や日々変化する必要性に対応できていたのだろうか…。

今回、活動を振り返り整理する機会をいただいたので、思うことと活動内容をまとめ、できるだけ時系列に整理してみました。混乱の中、記憶違いな箇所があるかもしれませんがご容赦願います。

また、震災後の早い時期から、日本介護支援専門員協会と日本社会福祉士会を通じ、専門職ボランティアとして全国から多数、それも継続的にご支援をいただいていることに感謝申し上げます。

1 東日本大震災で思うこと

(1) 介護保険制度があつて良かった

①ケアマネジャー

要介護高齢者一人ひとりに担当ケアマネジャーがついていたということ。これだけでも高齢者の安心感は大きい。津波の被災地では、ケアマネ自身が被災しながらも行方不明の利用者の安否確認に奔走していたということを聞いた。また、避難所においてのアセメントもおこなった。要介護でなかった人が、廃用や精神的なショックによって要介護状態になったとしても担当ケアマネジャーがついて生活支援の対応ができたことも良かったと思う。

②地域包括支援センター

要介護者同様、要支援高齢者一人ひとりに担当者がついていることと、要支援でなくても、要支援高齢者には包括支援センターの担当者がついている。

知的、身障、精神の支援状況を見ると、保護者がいるためなのか、在宅で生活する障がい者に責任ある担当者がついていなかったことが残念だった。

地域包括支援センター社会福祉士の本来機能である総合相談、権利擁護という役割が、生活再建に向けての支援につながるということも良かった。

(2) 平常時の活動が非常時に活かされる

①ケアマネジャー協会の組織

介護保険制度が始まる平成12年3月24日直前、宮城県の担当課長、担当者から心配・調整していただき、宮城県医師会、歯科医師会、薬剤師会、看護協会、OT・

P T協会，社会福祉士会，介護福祉士会，栄養士会それぞれの担当者により組織され現在に至る。名目だけの役員は一人もおらず，常に実働する人が役員を構成している。その後，県内 8 支部が作られ，理事がほとんどの支部長か事務局を担当している。

②地域連携支援事業

介護保険開始間もなくから，県内全域 8 支部の組織化を開始し，支部相互の巡回相談会，スキルアップ等地域の実情に合った研修会の開催等に対し，宮城県単独の地域連携支援事業として予算を付けていただいている。この継続的活動が今回の活動の源であったと思う。

③ケアマネジメントの指針と研修担当者研修

今回の避難所高齢者アセスメントで感じたことだが，通常時に重要視していたアセスメント力のスキルアップ研修の取り組みがこの非常時に役に立った。希望だけでなく生活全般をみる視点と，悪化の可能性，ケアの必要性を判断する視点である。また，アセスメントシートを県内統一にして研修を進めていたことが，避難所からの施設入所や，二次避難所へ移る際の情報伝達がスムーズにできた要因であった。

また，実務研修から主任ケアマネジャー研修まで，系統立てた内容にし，その研修の担当者の研修も実施してきた。宮城県の担当課からは，指導者はケアマネジャー協会の推薦による人にしていただくようになった。研修担当者は公開し，県内各地の居宅事業所や施設，県内各地の地域包括支援センター等に所属して活躍している。今回の津波地域の事業所や地域包括支援センターにもいて，皆が安否を心配した。

④宮城県社会福祉士会認定社会福祉士講習

地域包括支援センターに社会福祉士が配属されることに合わせ，平成 17 年から，総合相談支援，権利擁護を担当できるようにするため，宮城県社会福祉士会が認定する「認定社会福祉士講習」を実施してきた。全額自費で，年 12 回，講義と演習とレポートと合宿を組み合わせた講習にし，宮城県社会福祉士会が相談対応をする等全面的にバックアップする仕組みにしている。また，法律の専門職も含めた宮城県社会福祉士会が持つネットワークをフルに活用できるようにもしている。結構タフな内容であるにも関わらず，現在まで約 150 名が受講している。(内容はHP 参照)

～震災前の活動～

- ①平成 13 年～地域連携支援活動（巡回相談会）
- ②平成 15 年～ケアマネジャー指導者・支援者養成（研修担当者研修）
- ③平成 20 年～地域包括支援センター主任ケアマネ勉強会（事例を通して学ぶ）
- ④平成 13 年～ケアマネサポートセンター
- ⑤平成 15 年～宮城県版アセスメントシートと課題検討の手引き
- ⑥平成 18 年～地域包括支援センター総合相談対応のための「宮城県社会福祉士会認定社会福祉士講習」実施（延べ 152 名）
- ⑦平成 19 年～高齢者虐待対応専門職チーム：地域包括支援センターバックアップ
- ⑧平成 13 年～宮城福祉オンブズネット「エール」：高齢者障がい者権利擁護活動

今回の津波ことを振り返ると、被災地の支援というより、津波被災地にいるケアマネジャーと社会福祉士一人ひとりを心配して始まった活動だったと、確信を持って言える。

2 東日本大震災発生からの活動

ケアマネジャー、社会福祉士のボランティアを受け入れてもらえるまでの準備に時間がかかった。平時の活動により、顔の見える関係ができていたことは大きかったが、被害が甚大過ぎた。押し付けにならず、負担にも感じないように時間をかけ、少しずつ具体的に提案していった。市町村と県、行政の担当課間、本所と支所等、できるだけ足を運んで報告し、話しを聞いていただくことに努めた。市町村の窓口となる人を決めて関わることにしたが、市町村の調整役を宮城県の長寿社会政策課がおこなったことも効果的だった。これも平常時の関わりによるものだろう。

津波被災地域の行政職員は100%以上の力で頑張って住民の支援活動している。自らも被災し家族を失ったまま働き続けざるを得なかった人達もたくさんいる。そこに私達ケアマネジャーや社会福祉士が専門職として何ができるのだろう。

個人的に、支援物資を運んだり、片付けを手伝ったり炊き出しをしたり、義捐金を送ったりする人もいるだろうが、「専門職として何ができるか？」である。医療チームのように、自前で診療車を持ち込み、キャンプし、無料で治療し、無料で薬を出すといった自己完結な対応をすれば行政に負担はかけないが、ニーズ調査をして問題を見つけて置いてくるだけでは、被災地の担当者の負担を増やすばかりである。私達も問題を見つけたら、当然現地担当者への報告・指示は必要だが、何等かの方法で完結まで関わるといふ、負担をかけない自己完結型の対応をしなければならない。

また、アセスメントの結果や情報、関わりの経緯等のデータはその市町村のもの、地域包括支援センターのものであることを理解して関わることも重要である。地域によっては、保健師の健康調査の結果と、社会福祉士の生活支障調査の結果を一つにファイルして保管する等の工夫をした。

制度仕組みが出来ている現在は、住民に対して団体が直接的に支援するのではなく、おこがましい言い方かもしれないが、ケアマネジャーや社会福祉士は行政支援、地域包括支援センター支援が適切な方法と考える。

(1) 宮城県ケアマネジャー協会

- ①避難所高齢者アセスメントにより保護の必要性を把握し、市町村の判断材料を提供すること。
- ②避難所や在宅の健康調査に協力すること

(2) 宮城県社会福祉士会

- ①地域包括支援センターの業務支援をすること。
避難所、在宅、仮設住宅での生活の支障を抱えている住民を見つけて問題を解決すること。被災関連問題解決と生活再建の支援に関する総合相談に対応すること。

このような総合相談対応は、平常時に何件もあることではないが、今回の津波被災によって一気に何千件も発生すると安易に予測できる。しかし、地域包括支援センターには基本3人しか職員がいない。長期的な人的支援が必要である。

また、震災直後から仙台弁護士会の有志による現地活動への同行、個別の同行訪問、訪問による総合相談対応で関わっていただいた。

3 今後の被災地での相談支援

市町村、地域包括支援センターの支援を中核にして、社会福祉士会、ケアマネジャー協会、弁護士会と協働による、仮設住宅の生活と生活再建に向けての総合相談支援をすること。

- ①地域包括支援センターの総合相談・権利擁護業務支援
- ②仮設住宅サポートセンターの支援
- ③仮設住宅のライフサポートアドバイザー、生活支援相談員の活動支援
- ④仮設住宅を中心とした、福祉・介護・法律等、生活再建に向けての総合相談会等の開催と実務
 - ・ケアマネジャー：高齢者の生活相談と支援
 - ・社会福祉士：全年齢、全障害がい者の生活相談と支援
 - ・弁護士：生活全般、生活再建に向けての法律相談支援

4 振り返って思うこと

- ①ケアマネジャーのスキル 専門性拡大の必要性：介護保険だけでない総合相談対応
- ②地域包括支援センターの総合相談対応能力
- ③ニーズ変化への対応 生活支援、生活復興支援のための異業種協働
(補償、相続、金銭、債務、養育、介護、土地、就労、住宅...)
- ④活動の自己責任と自己完結：被災地に負担をかけない、仕事を増やさない。
- ⑤宮城県内の方は津波被災地に、県外の方は宮城県と津波被災地に負担をかけない。
- ⑥過去を持ち込まず、比較を口にしない。

高齢者入所施設の被災状況

2011.6.1.

	施設	水没	焼失	全壊	浸水	計	定員	入所者		職員	
								死亡	不明	死亡	不明
特養	121	5		2	3	10	6,972	136	12	18	13
養護	10	1				1	796	46	2	24	
老健	80	1			1	2	7,713	54	1	2	17
経費	45	2	1		2	5	1,369	21	2	4	3
GH	207	9		8	3	20	3,127	31	7	2	4
計	483	18	1	10	9	38	19,977	288	24	50	37

東日本大震災（宮城県）

	人口 2010/2/1	死者・行方 不明者 5/29	避難者 3/14	住宅全壊 (流失)	備 考
山元町	62,881	740	4,191	2,103	
亘理町	34,773	268	6,169	2,369	
岩沼市	44,138	183	5,700	692	
名取市	73,576	1,037	7,012	2,676	
仙台市	1,046,902	691	96,710	9,877	
多賀城市	62,881	187	10,902	1,500	
七ヶ浜町	20,377	75	3,871	667	
塩釜市	56,325	21	8,079	386	
松島町	15,017	4	1,900	103	
東松島市	42,859	1,298	13,376	4,791	
石巻市	160,336	5,795	111,295	28,000	
女川町	9,965	1,046	1,160	3,021	
南三陸町	17,382	1,174	7,660	3,877	
気仙沼市	73,279	1,496	17,324	8,383	

計 68,445 仮設住宅 22,516

居宅介護支援事業所及び地域包括の状況(津波被災地)

市町村	居宅介護支援事業所			地域包括支援センター		
	設置数	人的被災	事業所被災	設置数	人的被災	施設被災
仙台市	234	0	2	44	0	3
石巻市	39	6	16	9	1	4
塩釜市	28	0	0	3	0	0
多賀城市	13	0	2	3	0	0
気仙沼市	21	1	8	1	1	(1)
名取市	17	0	1	3	0	1
岩沼市	10	0	1	4	0	1
東松島市	11	2	4	1	0	0
亘理町	8	1	0	1	0	0
山元町	6	1	2	1	0	1
女川町	1	0	0	1	0	1
南三陸町	4	0	4	1	0	1
七ヶ浜町	5	0	1	1	0	0
松島町	7	0	0	1	0	
計	404	11	41	74	2	12(1)

～その後の活動概要～

03.11. 午後、仙台戦災復興記念館4階で、宮城福祉オンブズネット「エール」主催の地域包括支援センター職員研修「セルフネグレクトとその対応」を開催中に被災。

「セルフネグレクトとは！」という説明をし、次に事例の紹介が始まって間もなく強烈で長い揺れに襲われた。天井材が落ち始め非常放送が鳴り響き、電気が消えた。参加者全員屋外に避難し、中止を宣言して解散。たまたま、翌日介護支援専門員指導者研修を担当するため栃木県宇都宮市に車で行くことになっていたため、ガソリンを満タンにしたばかりだった。また、会場近くは立体駐車場の多い場所だったが、たまたま平場のコイン駐車場に停めていて、なぜか停電でも料金を精算して出庫することができた。ビルから避難して歩道で茫然としている群衆を脇に見て、信号の消えた国道4号線の大渋滞に巻き込まれながら角田市の事務所へ戻った。

後で知ったことだが、立体駐車場に停めていた仲間は1週間ほど出庫不能だった。参加者のほとんどは地域包括支援センターの社会福祉士であったため、何とかして仕事に戻りたい。直営の包括職員はそのまま数日間缶詰となり住民支援被災者対応となった人もいたし、自らが避難所に避難せざるを得ない人もいた。

途中、名取市イオンモール付近の4号線を走っていたころ、車のテレビから不思議な映像が流れていた。「今、仙台空港に津波がきました！」という生の映像だった。空港の滑走路にゆっくりと水が入ってきて、車等が流されている映像がはっきりと映し出されているのだが、「そこまで水が来たんだあ…」と思うぐらいで、実感はまるで無い。信号が消え、停電であるということは分かっていたが、遅くとも明日ぐらいには復旧するだろうと思っていた。携帯電話もメールも通じていたため、翌日のこともあり栃木の担当者ともメールでやりとりし、「明日は大丈夫でしょうか？」のような呑気なやり取りをしていた。仙南地区の地震自体の被害は、火災も全壊もなく、多少傷んだ程度。

停電でも、車のテレビで情報を得ることができた。そして、その情報は見れば見るほど悲惨な情報だった。しかし、まだ現実のこととは思えなかった。

03.12. 電気、水道がダメ。ガスはプロパンなので可。

街に行ってみると、ホームセンター等に長蛇の列。並ぶのが面倒なので、みんなの買わない500リットルの水タンクを購入。軽トラックに積んで飲用可能な山の湧水で満たし、近隣住民用の簡易給水所を設置。寒かったため、大なべで湯を沸かし、湯の炊き出しを開始。田舎で百姓なので、ご飯はガス釜、灯油等の燃料の備蓄あり、米や野菜は売るほどある。たまたま、宮城県沖地震で止まっていた自家水道が今回の地震で復活し、飲めるほどきれいではなかったが近所の生活用水が確保できた。

電話もメールも全く繋がらなくなった。すぐに復旧するはずだったのに…

03.13. 巨大津波被災地、亘理、山元、岩沼、名取、仙台へ。ケアマネ協会会長と協議後、宮城県庁へ出向き、担当課：長寿社会政策課と協議。ケアマネ協会は「避難している要介護者保護支援を担当する」こととする。

悲惨な津波の報道は続き、不安と心配は増すばかり。電話が全く繋がらず復旧の見込み

も立たないので直接行くしかない。ケアマネジャー協会として何をすれば良いのか考えながら、隣町亘理町で病院と老人保健施設を運営する宮城県ケアマネジャー協会会長の三上先生に会いに行った。

現場に行って茫然とした。海岸から数キロ離れた町はずれまで海になっていた。大雨による洪水とも違う。当然通行禁止で奥まで入れない。会長と会った。施設内は混乱し、デイケアの利用者がそのまま寝泊りしている、家族と全く連絡がとれない、職員の安否もわからない、職員も家族の安否がわからないまま働いている…等聞かされる。

ここで初めて、甚大な被害であることと、地震の被災地と津波の被災地は全く違うということを実感した。三上会長と協議し、宮城県ケアマネジャー協会として「大津波被災地と大津波被災地の避難所に数多くいるはずの要介護高齢者の保護」の支援をすることとして宮城県庁に向かった。信号が消えたままの道路は車の数も少ない。停電なのでガソリンスタンドも営業していない。途中、ケアマネ仲間のいる岩沼市沿岸の高齢者施設向かうと、東部道路を超えてすぐのコンビニが津波の被害を受けていた、仙台空港近くの倉庫や航空大学の駐車場が自動車とセスナが重なり合って水に埋もれていた。道路は、車がやっと通れるぐらいに自衛隊がボロボロの車と瓦礫を寄せてくれていた。馴染みの光景が一変しており、水も引かず目的の施設にはたどり着けなかった。仙台市内に入ると、ダイエーが営業しており、数百メートル以上の長蛇の列ができていた。県庁の周りは自衛隊の車だらけ、路上駐車し県庁7階の長寿社会政策課に向かった。県庁1階ロビーには日赤支援物資の毛布が山積みされ、3階まで避難者で溢れていた。当然エレベーターは動いておらず、階段を上って長寿社会政策課に着くと、課長の渡辺さんを始め全員が揃っており、緊急対応と調整にあたっていた。ケアマネジャー協会としての対応方針「大津波被災地と大津波被災地の避難所に数多くいるはずの要介護高齢者の保護」を伝え、ケアマネジャー協会が手分けして施設の受け入れをお願いしてくることにした。避難所に保護の必要な要介護高齢者がいたら、市町村から県へ連絡、県が施設を探し何等かの方法で移送し、緊急入所という流れを作っていた。

戻る途中に、社会福祉士のいる名取市閑上の施設に向かったが予想通り通行止め。沿岸から5キロは離れている東部道路を超えて津波に襲われていた。こちらは自動車と船と瓦礫が混在していた。馴染みの地形地理が分からなくなっている中、通行止めと冠水を回避しながらナビを頼りに目的地に向かう。途中、片付けしている人に聞くと「昨日はここも海だった。」と聞かされる。冠水と火災により目的施設の数百メートル手前で断念せざるを得なかった。

03.14. 避難要介護者保護に向けて、宮城県、被災市町、受け入れ施設と調整へ。

居宅介護支援事業所として改めて利用者の安否と支援の必要性を確認。デイサービスがストップし、ガソリンが無いために訪問介護も危なくなっていた。家族で対応ができるのか、代替サービスが必要なのか、停電による支障（エアーマット、酸素、吸引等）への対応等の確認と調整だった。合わせて、仙南の高齢者施設への救急入所受け入れ要請のため手分けしてお願いをして歩いた。水、食料、燃料の不足する中、訪問したすべての施設で受け入れを受諾していただいた。

ガソリンスタンドで、手回しでの給油が始まる。契約スタンドで優先給油してくれると

いうのでいくらか安心。

03.15~16 ガソリン調達（新潟へ・・・）

安心していたら、すぐガソリンが底をつき、いつ入荷するかわからないという。

まだ、仙南しか行っていないのに…

携帯電話もなんとか繋がるようになってきた。

宮城県内はあきらめ、秋田と山形と新潟の仲間と連絡をとり、なんとかガソリンを調達してほしい、タンクローリーを借りても取りに行く！とか無謀なお願いをした。新潟燕三条の社会福祉士、池内さんが骨を折って調達してくれた。「計画停電があるかもしれないので、明日朝7時に来てくれ！」という嬉しい連絡。「行きます！」と即答したものの、さてどうしよう。新潟燕三条まで片道300キロ、車のタンクのガソリン残が約30リットル、燃費はリッター8キロ、エコで走ればなんとかなるかも、自宅にガソリン携行缶が4つ、その他は近所の農家等から借りて240リットル分確保した。先方のスタンドの人に御礼の電話を入れると大変気持ちの良い対応をいただいた。さすが中越地震や水害を経験している新潟の人だと感じた。

夜0時出発、季節外れの大雪だった。高速道路は入れないので一般道113号線を使って新潟へ。山形に入るとコンビニが開いていた。久しぶりの光景だった。途中、地域包括支援センター部会でお世話になっていた日本介護支援専門員協会副会長の森上さんからメールが来た。17日に宮城に来てくれるそうだ。

朝6時ごろスタンドに到着。待っていると間もなく担当の人が到着し、給油してくれた。聞くところによると、自家用車で運べるのは40リットルまでだそう。今回は非常時ということと、自己責任でということで、勝手に納得させた。その後、池内さんと連絡をとり施設にお邪魔して御礼を伝えた。同じ社会福祉法人の社会福祉士である高橋さんにも会い、状況の報告と感謝を伝えた。さらに、私の好きな新潟の地酒をたっぷりいただいて帰路についた。新潟の社会福祉士会のみなさんとは、介護保険前からの付き合いである。多少遠いが、高齢者ケア、権利擁護等互いに行ったり来たりする仲間である。今回も気持ちよくお世話になった。途中支援物資の調達もした。コンビニ2軒を廻り、カップ麺とチョコレートを買占め、下にはガソリン、上には食糧で、ワゴン車が満杯になった。雪で寒かったが、窓を開け、ヒーターを切って爆発しないように静かに走って帰る。ついでに、髪が伸びて邪魔だったので途中の美容院に寄った。計画停電が中止になり、ちょうど店を開けに来たところを急ぎでお願いしたのだが、快く応じてくれた、宮城からガソリンを調達しに来たこと等話をしながら短くカットしてもらった。料金を払おうとすると、「お金はいらない。」と言われ、避難所が寒いと話していたら、大きい袋に一杯の防寒着を持たせてくれた。さすが新潟の人だと改めて思った。とても暖かく有りがたかった。また、新潟市内の弁当屋に寄り種々の弁当を大量に購入。夕方、無事に角田の事務所の戻り、ガソリンと弁当をスタッフみんなで分けた。北に向かう準備OKとなる。

03.17.東松島、石巻、女川へ。役員・支部役員等の安否確認と連絡体制確保。（清野、内田、小湊、他7名）

前日から連絡をとり、ケアマネジャー協会副会長清野さん、ケアマネジャー協会理事、社会福祉士会認定講習担当内田幸雄さん、社会福祉士会事務局及川さん、我事務所4名の

7名で、宮城県庁に向かう。長寿社会政策課で打ち合わせ後、高速道路に入れる「緊急車両ステッカー」を用意いただき、石巻方面へ向かう。

東松島市。3年間毎月1回、主任介護支援専門員の勉強会に通っていたところであり、矢本のケアマネ連絡会でも年に数回関わらせていただいていた。勉強会の主催者である東松島市地域包括支援センター所長の真籠さんの安否が気にかかる。健康センターに着くと馴染みの保健師さんたちに会うことができた。本所に向かうとボロボロになった真籠さんと再会することができた。訪問中に津波に巻き込まれ、車ごと流されたが九死に一生を得たようだ。良かった。またすぐ来ることを約束して次に向かう。

石巻市。石巻河南インターを降りて川に近づいたあたりから津波に襲われていた。ケアマネジャー協会石巻支部長丹野さん、副支部長の江藤さん。2人共被災したが生きていた。患者で溢れる石巻赤十字病院で再会することができた。薬剤師である丹野さんは、石巻市立病院近くで薬局を経営していたが、流され、燃えた。その後ずっと日赤に詰め医療チームの一員として活動していたということだった。ガソリンや食料の支援物資を置き、すぐまた応援に来ることを伝えた。石巻市役所を訪れ、介護保険係と話す。雄勝の特別養護老人ホームが孤立し、崖から落ちそうだということだった。県庁と連絡をとりながら避難所へ。避難所になっている石巻専修大学。留置カテーテルを使用している寝たきりの高齢者10名ほどが、コンクリートの廊下の踊り場に僅かの毛布をしいただけの状態での避難していた、救急センターの看護師が慣れない介護を担当し、どうすれば良いのか連絡もつかないまま介護にあっていた。とりあえず必要なポカリスエットと水、新潟から預かったものと持ち寄った防寒着を置き、今後の対応を考えながら女川に向かった。

女川町。真っ黒い泥にまみれた石巻市を抜け女川に近づくと、奇跡的にほとんど津波の被害を受けていない万石浦が現れた。しかし、万石浦を抜けるとそこは別世界だった。女川町は何も無くなっていた。瓦礫に埋まり、海拔18メートルの高台にある病院も一階部分が津波に襲われていた。当日ケアマネジャー協会石巻支部の研修会がこの場所でおこなわれており、病院患者の避難誘導にあたるが被災は免れなかった。鉄筋コンクリートの堅牢な建物がなぎ倒され、3階建てのビルの屋上に車が乗っていた。

女川町の社会福祉士、ケアマネジャーに会うことはできなかったが、福祉の担当者に会うことができ、生存は確認できた。会った町の担当者も家も家族も失っていたり、心身ともに受けた傷は計り知れない。

一同茫然としながら仙台を経由して帰る。3月17日雪。高速道路はアイスバーン。仙台市内は積雪20センチの大雪だった。

日本介護支援専門員協会副会長3名（森上、高橋、濱田氏）宮城に来る。

県庁で日本介護支援専門員協会副会長3名と合流。この早い時期に来ていただいたことに感謝します。

03.18.南三陸，気仙沼へ。役員・支部役員等の安否確認と連絡体制確保。（清野，内田幸，小湊）

3名で南三陸に向かう。三陸道を終点まで走り、本吉街道から南三陸町志津川へ入る。山の途中から急に津波の襲った跡が現れる。女川同様壊滅である。何度も通って知っているはずの道路がわからない。目印が無くなっている。避難所になっているベイサイドアリ

一ナ、歌津中学校に出向くが、以前から世話になっている保健師やケアマネジャーに会うことが出来なかったが、無事というか生きていたことは確認できた。ただ、家も事業所も家族も亡くしたことが知った。三陸の浜や港が万遍なく破壊され、道路が寸断されている。迂回路を頑張って気仙沼へ。

気仙沼市。ケアマネジャー協会気仙沼支部長森田先生と途中で電話が通じた。病院も津波に襲われ2メートルほど水が来た跡が残っていたが、診察を始めていた。再会でき、清野さんが大騒ぎだった。森田先生と共に気仙沼市役所に行き、今後の支援の在り方と要介護高齢者保護の方法について知らせた。気仙沼、南三陸は、登米支部が中心となって支援することを伝えた。

亙理町，山元町状況確認，仙南保健福祉事務所へ状況報告。

角田の事務所のスタッフが分担して、施設、事業所、包括支援センター、保健福祉事務所に状況報告と今後の支援について伝えた。亙理町では、町内施設の受け入れ準備ができ、ケアマネ連絡会のメンバーが避難所高齢者のアセスメントを開始し、夜には緊急入所の必要性が検討された。

03,20.宮城県社会福祉士会，日本社会福祉士会として「津波被災地の地域包括支援センターの支援をする」をすることになる。日本社会福祉士会本部担当者が来仙。

社会福祉士会として、津波被災地の地域包括支援センターの支援に入ることになる。災害支援委員長西澤さんを中心に総合相談支援の準備を開始する。

日本社会福祉士会副会長田村さん他、仙台入していただき協議。

03,21. 総理大臣石巻に来る：キャンセル！（丹野，支部役員，小湊）その後女川へ。

前日、日本介護支援専門員協会から連絡が入り、菅総理が石巻に行くので宮城県のケアマネ協会でも出席するよということなので、支部長の丹野さん、支部役員の坂下さんと共に朝8時に石巻市役所で待ち合わせた。しかし、行く途中のNHKラジオから「悪天候のため、菅総理の石巻訪問中止」と流れて呆気にとられる。雄勝地域包括支援センターの坂下さんと再会。兵庫から来てくれた森上さんを連れて女川に入り、今後の支援について協議。

03,22. 南端：山元～北端：気仙沼の包地域包括支援センターへ。

宮城県社会福祉士会副会長鈴木守幸さん、災害支援委員長西澤さん、事務局及川さんと小湊で、直接会った方が良くと思われる地域包括支援センターを訪問し、現状の把握と、社会福祉士会ができる支援内容伝えて歩いた。分かったことは、直営の地域包括支援センターの職員は、直接避難所に張り付いて住民支援をおこない、地域包括支援センターの役割まで担うことができない状態で、気仙沼市は連絡もとれない状況だった。（山元町，亙理町，東松島市町地域，女川，南三陸町，気仙沼市）

また、委託の地域包括支援センターは、所属法人の業務が優先される傾向があった他、石巻市では地域包括支援センターが被災し要支援者の安否確認に追われていたところもあった。

北に向かう途中の気仙沼市本吉町で、南三陸歌津のケアマネジャー三浦さんと連絡がとれ、やっと再会。気仙沼市では地域包括支援センター職員はまだ避難所対応に追われていた。

03.24. 避難所（被災）高齢者アセスメント表作成

日本介護支援専門員協会のボランティア拠点が自治会館 208 に置かれた。東松島市地域包括支援センターの機能が回復し、25 日から避難所高齢者アセスメントを開始することになった。それに合わせ、緊急入所の必要性を市に根拠を持って伝えるために、「避難所高齢者アセスメントシート」を作成し、宮城県ケアマネジャー協会HPからダウンロードできるようにした。また、日本介護支援専門員協会ボランティア先発隊により「ボランティア心得」が作成され、同様にHPに載せた。

03.25. 日本介護支援専門員協会ボランティア始動。（東松島市アセスメント）

東松島市、石巻市、女川町へ仙台弁護士会の弁護士有志も同行

避難所高齢者アセスメントを開始するにあたり、東松島市の担当者（担当係長、包括支援センター職員との打ち合わせをおこなった。話し合いには、小湊の他、仙台弁護士会有志の村田先生、大橋先生、宮城福祉オンブズネット「エール」の谷さんも同席した。

03.26. 宮城県社会福祉士会役員会開催。宮城県社会福祉士会は「津波被災地の地域包括支援センターの支援をする」ということを確認する。

宮城県社会福祉士会は、東松島市の地域包括支援センターへのボランティア支援をモデル的に進めることと調整を始める。ボランティアは日本社会福祉士会にお願いし、宿泊場所は、地域包括支援センター所長の真籠さんが市職員と同様の場所を手配してくれることになる。宮城県社会福祉士会からは、認定講習受講者を中心に総合相談対応ボランティアを募る。

03.27. 石巻、女川、南三陸、気仙沼へ。（古積、内田裕、大谷、草刈、菅原、小湊）

宮城県ケアマネジャー協会役員、事務局で現場入り。今後の対応を考える。医師で副会長の草刈先生は診療道具一式を用意、看護師古積さん内田裕子さん、保健師で副会長の菅原さん、事務局菅原さん、小湊の6名で被災地へ向かう。内田（裕）さんは多賀城の自宅が流され、避難所から通いながら訪問看護をおこなっている。今回都合で参加できない役員すべてと連絡がとれ、ケアマネ協会として一枚岩の対応をしていくことになる。

03.28. 会員及び居宅介護支援事業所安否確認開始

電話が概ね復旧したため、津波被災地域が住所か勤務先になっている会員を対象に、改めて安否確認を開始する。

03.28. 避難所に要介護高齢者が多数存在！

宮城県が、避難所要介護者を県内の特養・老健で入所定数の10%の緊急入所受け入れを強力に指示。

津波地域の避難所によっては、50名近く要介護高齢者が避難所にいることが判明。当初は天災だが、3週間近くたったのこの状態は人災だ。この状況を県の担当課に報告し、宮城県から、さらに強力な緊急入所受け入れを県内すべての特養、老健に通知していただい、新聞報道もなされ、急速に改善された。これでこそ行政、頼もしかった。

03.29. 日本自動車販売協会連合会宮城県支部より、ケアマネボランティア用車両の提供をいただく。

日本自動車販売協会連合会宮城支部より、活動用の自動車を無償で借りることができた。3月25日から日本介護支援専門員協会のボランティアが東松島市に入っていたいている

が、仙台の東北福祉大学関連の施設を拠点としているため、自動車での移動である。中心で活動している、三重県小林さんと受け取ってきた。当初は 5 人乗りのステーションワゴンだが、後日 8 人乗りの福祉車両のワゴン車と交換していただけるそう。

当初、とあるディーラーの営業担当者に「ボランティアで使うので保険付きの車をただで貸してほしい！」と無謀なお願いをした。車が多数流され台数不足の中、無理なお願いだったが、検討もせず無理と言われる。所長に直接交渉も却下。やむなく宮城の本店に直接交渉すると、やや良い感じで返事待ちとなった。しかし結果は同じ。自販連という販売店の連合会を紹介だけしてくれた。自販連に行き、担当者に事情を説明させていただくと、大変好意的に対応をしていただき、結果的にお借りすることができた。車両提供はホンダカーズ宮城でした。厚く感謝無押し上げます

03.30. 宮城県保健福祉部、長寿社会政策課と石巻との協議

宮城県保健福祉部次長の佐々木さん、長寿社会政策課小松さん他を車に乗せ、石巻方面に向かった。石巻市に着くと石巻市の部長、課長他担当者とは県とケアマネ協会と社会福祉士会の緊急合同会議を開催することになった。県の役割と福祉団体の支援内容の確認が一度にできた。その後石巻、女川を視察した。早いうちに県の中核の人達に現地に足を運んでいただくのは有りがたいことである。

04.01～総合相談ボランティア開始。(東松島市地域包括支援センター)

地域包括支援センターの福祉の総合相談対応社会福祉士ボランティア始動。日本社会福祉士会から、常時 2 名、4～5 日交代で来ていただく。第一陣は、山形の川部さんと大阪の三木さん。

04.02. 長寿社会政策課と気仙沼市との協議

気仙沼市役所を会場に、気仙沼市担当課長、地域包括支援センターと宮城県長寿社会政策課課長、宮城県ケアマネジャー協会、宮城県社会福祉士会と合同会議を開催。

宮城県社会福祉士会が福祉避難所運営、宮城県ケアマネジャー協会が避難所高齢者アセスメントを実施し、気仙沼のケアマネが医療チームと合同で巡回することとなる。

04.04. 石巻市のボランティア活動拠点調整

日本社会福祉士会担当者と石巻へ。東松島市と石巻地域包括支援センター社会福祉士ボランティアの拠点調整。社会福祉士会西澤さん、及川由さん、小湊、で地元社会福祉法人役員渡辺さんと協議。特養涼風苑施設長曾根さんと面接調整する。

04.04. 地域包括支援センター支援調整担当を決める

亘理町、山元町：加藤美和子さん

名取市、岩沼市、東松島市、石巻市、女川町、南三陸町、気仙沼市：小湊

仙台市、多賀城市、塩釜市、七ヶ浜町：鈴木守幸さん

04.05. 亘理町地域包括支援センターで総合相談支援

福祉避難所高齢者の行政手続きや自宅確認等をするために、社会福祉士加藤美和子とケアマネジャーがボランティアで入る。

04.09. 気仙沼市福祉避難所運営とアセスメント

登米市の社会福祉士とケアマネジャーが担当。当面週 3 日 2～3 名ずつ対応する。

担当は、社会福祉士：鈴木俊彦さん、ケアマネジャー：佐藤敏明さん

04.12. 石巻市現場担当者との協議

避難所高齢者アセスメント、地域包括支援センターへの支援について石巻市介護保険係西条さんと協議。石巻市では支援の必要性があれば、宮城県の長寿社会政策課に調整を含めて職能団体に依頼することにしてきた。地域包括支援センターの体力回復まで、顔をだし、足を運び見守ることとする。

このころから、日本介護支援専門員協会のボランティアと宮城県、はそれぞれ別の依頼により活動をするようになった。

ボランティアは、市町村から県に依頼、県から社会福祉士会とケアマネ協会に依頼することによって動くという体制が出来上がった。「団体の想いで勝手に動くな！」ということである。主体は市町村であり支援団体ではない、という重要な考え方である。

04.14. 南三陸町現場担当者との協議

南三陸町地域包括支援センター高橋保健師とやっと会えた。自宅が被災したため避難所に寝泊りしながら仮設の庁舎での業務だった。地域包括支援センターの業務支援、二次避難所での支援について伝え、連絡待ちとした。

多賀城市地域包括支援センターに支援開始

中央包括支援センターへ。岩崎さん、庄子さん

04.18. 石巻市地域包括支援センターとの協議

「地域包括支援センターの支援が必要！」と石巻市の、とある地域包括支援センターからの要請があり、会議への出席を石巻市から依頼された。日本介護支援専門員協会森上さん、宮城県ケアマネジャー協会石巻支部長丹野さん、副支部長江藤さん、小湊、出席。ネット情報により「何とかしなければ」と思って来ていただいたことによる混乱。

04.20～総合相談ボランティア開始。(南三陸町)

日本社会福祉士会ボランティアによる総合相談支援開始。ベイサイドアリーナでの相談会と訪問相談を開始する。南三陸町地域包括支援センター保健師高橋さんが調整。

04.22. 石巻市雄勝町の実態調査と担当保健師との協議

宮城県社会福祉士会により、雄勝町避難所のアセスメント実地調査実施。石巻総合支所保健師との協議。

04.24. 石巻市牡鹿町の実態調査と担当保健師との協議

石巻市牡鹿総合支所保健師と、地域包括支援センター支援、対応の方法について協議。

04.28. 厚生労働省川又課長と協議

仮設住宅サポートセンター、事業所再建支援の仕組みについて説明をいただく。必要事業所に早速通知する。やはり、国の課長クラスが現地入りしていただくのは有りがたいことである。

04.29. 石巻視察案内：厚生労働省川又課長

川又課長、日本介護支援専門員協会鷺見さんと石巻に入る。合併前旧町の被災状況を見ていただく。

05.02～石巻市雄勝包括：生活支障アセスメント開始

冠水、道路破損等危険を伴う雄勝町は宮城県社会福祉士課会が担当する。旧町役場、消防署、警察署、病院、コンビニ、すべて壊滅した地域である。

避難所やライフラインの途絶えた地域の生活の支障を聴取した。まずは趣旨説明を地域で活動している民生委員にする。仙台弁護士会大橋さんも同行。病院のように管理された準福祉避難所の実情も確認できた。

05.05. 東松島市：健康支援調査開始。

東松島市のヘルス部門からの依頼で、宮城県ケアマネジャー協会が健康調査のボランティアを開始する。健康調査の結果を国際医療チームにデータと共に報告。翌日医療チームが調査地域で臨時診療所を仮設し無償で診療するという状況。

05.11. 石巻市渡波包括：生活支障アセスメント開始

宮城県内4か所目の日本社会福祉士会ボランティア始動。復旧した地域包括センターで開始。

05.16. 日本介護支援専門員協会木村会長と協議

日本介護支援専門員協会課長木村さんと宮城に来る。宮城県ケアマネジャー協会三上会長と協議。その後被災地を視察していった。

岩沼市：健康調査開始。～7月

岩沼市ヘルス部門より、仮設住宅と被災地住宅の健康調査開始。宮城県ケアマネジャー協会と、宮城県社会福祉士会で担当した。

05.19.～石巻雄勝町外出支援開始（継続中）

生活活性のための支援開始。ケアマネで社会福祉士の清野さんとその相方が担当し、毎週通うことになる。温泉に入って、買い物して、話しをして、楽しんで・・・

05.20. 石巻市稲井地域包括支援センターでボランティアの情報交換会開催。(西澤, 及川健, 及川由, 小湊), その後準福祉避難所で日本MSW協会と協議。

石巻市地域包括支援センター打ち合わせ、県保健福祉事務所小川さん、石巻市西條さん同席し今後の支援体制確認。「本来の地域包括支援センターの役割を！」

05.23. 石巻市中央包括：生活支障アセスメント開始

宮城県内5か所目の日本社会福祉士会ボランティア始動。

仙台市：認知症ケアについての協議

仙台市の認知症ケアに関する支援のあり方について協議

05.26 石巻市桃生準福祉避難所：生活支援打ち合わせ

石巻市、県保健福祉事務所からの依頼で、生活支援についての支援について協議。

06.01～女川町：地域包括支援センター支援開始（～6.17）

宮城県ケアマネジャー協会研修担当者より、被災在宅高齢者のアセスメント・ケアプラン実習支援開始。訪問面接とアセスメント、ケアプラン作成までの支援。

06.02～石巻市桃生準福祉避難所：生活支援開始（～6.16）

準福祉避難所から仮設住宅や施設、自宅に戻るための総合相談支援開始。宮城県社会福祉士会、仙台弁護士会有志で担当。補償申請から、通帳再発行まで…。

06.13. 亘理町：仮設住宅居住者支援について協議

亘理町担当課長、地域包括支援センター條さん他と、仮設住宅サポートセンター設置に向けて、宮城県社会福祉士会、宮城県ケアマネジャー協会の支援体制について説明協議。仮設住宅で相談会開催することになる。

06.21. 気仙沼市：仮設住宅居住者支援について協議（西澤，及川由，小湊）

宮城県社会福祉士会，宮城県ケアマネジャー協会，仙台弁護士会の支援体制について，気仙沼市地域包括支援センター保健師村上さん，社会福祉士村上さんと協議。待ちとする。

06.24. 石巻市地域包括支援センター打ち合わせ

地域包括支援センターの状況とボランティアの意見交換会実施。仮設住宅への支援と，宮城県社会福祉士会の活用について説明合意を得る。

06.25～亘理町：仮設住宅での総合相談支援開始(7.24まで5回実施)

メニューは，仮設住宅での生活と生活再建に向けた，福祉・介護・法律相談と対応。待ちの相談会と訪問を合わせて実施。

仮設住宅の部屋から出てきていただけるよう，かき氷，コーヒー等の交流のきっかけも作った。



08.02.石巻市仮設住宅総合相談実施に向けての打ち合わせ（西澤，高橋了，小湊）

石巻市仮設住宅運営管理室担当者と協議。宮城県の支援体制もお知らせし，市内全域のバランスや仮設住宅の状況に合わせ，8月20日から実施することになる。

08.20～石巻市：仮設住宅での総合相談支援開始

ヘルス，介護担当課と打ち合わせながら総合相談を実施する。20日開成，27日渡波，9月4日開成，10日南境，11月12日大森



09.02～女川町：地域包括支援センター支援開始

09.17～女川町：仮設住宅での総合相談支援開始

17日清水仮設，10月23日石巻バイパス，29日多目的広場，11月5日旭ヶ丘

09.05～宮城県サポートセンター支援事務所開設

宮城県，宮城県社会福祉士会，宮城県ケアマネジャー協会，仙台弁護士会の専門職団体と，NPO，県社会福祉協議会で，仮設住宅サポートセンターの支援を開始する。

活動報告 ～思うこと～

震災から雄勝ミッションに至る経過報告

宮城県ケアマネジャー協会副会長 清野 澄子

3月11日施設で被災、停電、断水とライフライン停止、物資、ガソリン不足。施設の利用者の命と向き合い必死の毎日だった。我が家の安否も気になりながら泊り込みの毎日であった。ラジオから流れる悲惨な状況をイメージできず皆生きていないのではないかと半分諦めていたが電波が通じて小湊さんからの電話は、夢のような出来事であった。

3月16日のこと、明日石巻へ行かないかと言われた時「行く！！」「行きたい！！」皆の無事を確認したいと思い待ち合わせ場所へ自転車を走らせた。道路がどうなっているかわからず小湊事務所の皆と同乗させてもらい、県庁に出向き許可証の発行並びに被害状況が把握できていない現状を知った。

仙南の安否は、小湊氏が確認してくれていた。塩竈支部役員に連絡し塩竈の状況を御願いしながら、東松島へ向かう。真籠さんが津波にのまれ急死に一生を得た事を知り涙が止まらなかった。石巻日赤病院へ向かい、石巻支部役員と涙の再会が出来た。津波で家が流され一番何が今必要かと聞いたところ長靴とのことにて各自が持参した長くつを置いてくる事が出来た。

津波の被害のすさまじさは、現地に行って始めて目の当りにした。石巻市役所まで津波が来て、避難者でごった返していた。避難所の数は、旧石巻市内は把握で来ているがその他皆無とのこと。たまたま、市役所でケアマネジャーに会うことが出来た。雄勝の雄心苑が余震で崩れ落ちる。その中に72名が孤立していることを知った。そこから、宮城県庁へ小湊氏から現状報告と調整が始まり全員無事に山形へ避難することが出来た。石巻の避難所を巡り、日赤病院から避難所へ出されコンクリートの上に薄い毛布を敷いて寝かせられ狭い空間で過ごさなければならない被災者の方々を見て一日でも早く暖かくケアできる福祉施設への入所が出来るようにしなければならぬと感じた。一つの建物に要援護高齢者が集められ、認知症の方が歩いている姿が異常な光景であった。早く何とかしなければならぬと思ってもなんとも出来ない自分に苛立たしさを覚えた瞬間であった。

石巻市から女川町への道は、やっと通れるくらいになっており回りには、流された車が電信柱と家の間へ挟まっており、被害の大きさにショックを受け女川町へついた時は、涙し

か出てこなかった。女川町立病院の1階まで波に飲まれ港の建物は悉く倒れ言葉は無かった。福祉避難所で安否確認、支部役員は皆無事である事が確認できた。

3月18日気仙沼の森田先生の所へ行くために向かう。途中石巻へ立ち寄り、南三陸町に寄り何もないことへ再度ショックを受け凄まじさを目にした。森田先生の病院にも津波の爪あとが残っており大きな声で先生を呼び再開できた。この2日間、ケアマネジャー協会各支部が出来ていたこと改めて感動を覚えた。森田先生の姿がホームページに載った。嬉しかった。

それから何が出来るか、この2日間の動きの中で各支部の状況把握をすることが出来たが個人の力ではなく組織的に動く事の大切さとヒューマンネットワークが大事であることを再確認できた。

ケアマネジャー協会が最強の職能団体であることは言うまでもないが、各支部からの要請を待つこと1ヶ月。東松島市の健康被害調査へ5月3日と4日参加する事が出来た。医療の必要を調査する、保健師とペアで決められた場所へ効率の悪い調査を行った。もっと、訪問件数を多くしなければ6千件の調査が終わらない状況。統計調査の手伝いをさせられ憤慨した。しかし、被災した住民の方との聞き取り調査は、奇跡の生還の話ばかり。残された自分たちが出来る事は何か生活の再建の一助になればとの気持ちで聞き取りを行った。皆快く話をしてくれた中でも今後津波のフラッシュバックが来て支援の継続性が必要であることを感じた。

ニーズは、震災直後から時間と共に変化している。仮設住宅への入所で安心できない。仮設住宅への健康被害調査依頼が各町からはいった。東松島市は津波の被害がなかった地域のケアマネジャーがチームで支援を行った。岩沼市は、仮設住宅入居後の調査依頼があり継続的な支援が必要な状況になっている。ニーズ調査は、各被災地域の包括支援センターが中心となり発信してくれ始めて支援が出来る状況となっている。

石巻市へ合併した雄勝町では、医療も介護も壊滅状態でありニーズ調査から外出支援、買い物支援が必要との判断から5月19日から毎週1回5名から6名の高齢者を迎えに行き、上品の郷へ日帰り温泉と買い物ツアーを実施して来ている。毎週、指定の集合場所へ行く皆元気に待っていてくれ、手作りの漬物などを持ち寄り楽しみにして待っていてくれたことを感じる。

車は福祉車両の為、足が悪いのと言いながらも楽に乗ってくる参加者。浴室は、特に心配な為に目視が重要。どこへ行きたいか聞く楽しみ、回数が増えるたびに地域の実情に詳しくなり大変勉強になる。一時間弱の車中話題は尽きない。大変な想いをしながらも思い出したくない3月11日の津波の話になる。津波に始まり津波に終わる小旅行であるが、介護予防の為に必要な支援と思う。福祉サービスだけがケアマネジメントではない。自立支援が最も大事な私たちの使命。7月19日は、上品の郷の花屋さんが「仮設住宅で花など植えるところないだろうけど、何もすつことないだろうからその花持って行っていいぞ！」と千日草を参加者へプレゼントしていた。

花屋さんの粋な計らいに感動をいただき、参加者も生き生きと帰っていた姿は印象的でした。宮城県ケアマネジャー協会の一員として、サービスがなければ創る、ケアマネジャーの役割があると教えられた事を思い出し、出来る事をやって行きたいと日々思っ活動

継続中である。

被災地へ出向き思うこと

宮城県ケアマネジャー協会理事 古積 美栄子

3月11日14時46分、利用者の訪問を終え国道4号線卸町付近を走行に震災に遭遇、職場に戻り利用者の安否確認と独居利用者を非難所へ搬送し職場の病院患者の対応に

追われる中、ラジオから聞こえてくる情報からは聞き覚えのある地名や施設の名前など様々な不安と恐怖を覚えていました。

これまで一緒に活動してきた仲間の人たちの安否の確認も出来ないままにいたときに協会事務局長より現地状況把握の声掛けがあり3月27日、東松島、石巻、女川、南三陸町、気仙沼へ行きました。見慣れた風景はあとかたもなく、異常な光景が目の前に広がり、これまで築き上げてきた住民の方々の切ない思いが伝わる思いでした。志津川病院前で見た土台だけが残った家の前に落ちていた1枚の写真は、何人かの人たちと楽しそうに笑っているものでした、この方がたの、この笑顔が又戻れるよう、この方がたらしい生活が、又出来るよう何とかならないだろうか・・・何とかしなければ・・・と

5月から始まっていた健康調査を基に、要観察が必要な住民の方々の課題分析を女川町で6月2日にさせていただきました。包括のスタッフの方と一緒に出向き状況を把握し必要時はプランに繋げることが目的でした。私が訪問した方は奇跡的に津波から逃れ命びろいした、それだけでも他の人たちと比べたら幸せです・・・と自分だけ世話になるのは申し訳ないと、とても謙虚に話されていました。しかし、長い目で見るとそんな思いをしている方こそ支援を続けていかなければいけない、このような方が多くいらっしゃる現実を見たような気がしました。包括のスタッフも、又被災者で避難所から通っている方もいらっしゃるし、そして、震災当日に車椅子の利用者を避難させる際、津波にのみれ、車椅子の利用者を助けられなかった・・・私が手を離さなければ・・・とその時のことを振り返り話してくださいました、気丈に笑顔を作られていましたが、これから時間が経ち、落ち着いたときに彼女の思いの中に今回のことが大きく負担になることが心配でした。このようにとんでもない体験をしながら、自らも被災しながら、被災された利用者の支援をしているケアマネジャーの支援もしっかりとしていかなければならないと感じてきました。

東松島市のボランティア活動に参加して

宮城県看護協会栗原訪問看護ステーション 千葉 真弓

東松島の町並みを見ての初感は、「なんてきれいに整備されているんだろう。」ということでした。ヘドロの被害で、大変な思いをされた市民の皆様が復興に心がけ、日々努力された様子が伝わって参りました。その中で気になったのが、頑張りすぎて健康を害した方が多数おられたのではないかとということでした。目の前の被害を立て直すべく、自分達の健康面まで目がいっていない。

東松島市は、人口も多く、そのための調査には件数をこなさなければならなかったのですが、個々の思い（精神面）までの聞き取りができなかったのが残念です。私たちが赴き何が出来る訳でもないのですが、「震災から二ヶ月経って初めて訪問してもらった。嬉しいです。」

という声も聞かれ、東松島の皆様の精神面へのフォローをもう少し時間をかけて聞くことができたという思いがあります。今回このような貴重な経験をさせて頂いたことに感謝申し上げます。

東松島市のボランティア活動に参加して

蔵王町地域包括支援センター 伊藤 俊明

5月7日にボランティア活動に参加しました。被災された方々が1日でも早く元の生活に戻れるようにと思いボランティア募集に応募しました。しかし、私に何が出来るのか、何の役に立てるのか、とても不安な思いや葛藤を抱きながら活動に参加しました。

野蒜地区は「かき祭り」など家族で遊びに行く思い出の土地でした。しかし、野蒜地区には当時の面影が全くなく、愕然としました。

訪問したお宅では寝泊りは避難所、日中は自宅内に入り込んだ泥や庭の整理をするという生活をされていました。「自分たちのことは自分たちでがんばろう。」と前向きに生活されている様子が伺えました。その反面、聞き取りをする中で精神的に不安定な方もおり、生活の場や職の確保等と同様に精神的なケアも大切だと感じました。

私が今回の活動で役に立ったかどうかわかりませんが、1日でも早い復興を願い、これからも機会があれば活動していきたいと思います。

東松島市のボランティアに参加して

リハビリパークあやめ 西山裕子

5月にケアマネジャー協会のボランティアとして、東松島市の健康調査に参加させていただきました。

東松島市は東日本大震災により、人命や家屋の損壊等被害が甚大で、不自由な生活を強いられている方が多くいらっしゃいました。そこで、行政サービス提供の為の基礎データを作成すると同時に、被災による健康影響に関する調査資料としても活用したいという趣旨のもと、世帯一人ひとりの方達の、生活及び健康状況の詳細な調査が行われていました。

参加していたのは、役場の職員の方達を中心に、日本全国から参加された保健師、医師、看護師、ケアマネジャー等のボランティアの方達で、日祭りを問わず、調査が行われていました。これだけ大がかりな事業を、震災直後の混乱と、それに伴う業務に追われる中、休日返上で一生懸命実践している姿は、市民の健康を優先した上で行政の立て直しを図っていることと実感し、素晴らしいことだと感動しました。

また、調査に際し、一人暮らしで、地震後愛犬が窓から逃げてしまい、その犬に導かれたおかげで一命をとりとめたというお話を伺いながら、実際津波の被害の爪痕が残るご自宅の様子を目の前にして、命のはかなさと運命の厳しさを感じ、これからどう生きていくのか、改めて考えさせられました。

今回の支援は、自宅あるいは避難所の住環境や生活状況を把握し、健康に支障がでないか、精神的な問題は出てきていないかということ、一人ひとりからお話を聞き取ることだったので、私達ケアマネジャーの大切な業務の一つである、相談支援に相通じる内容だったように感じました。この経験は、今後の業務にも行かしていけるのではないかと

思います。

ただ、仕事の合間をぬった短い期間の参加だったため、慣れない調査で、あたふたしているうちに終わってしまったのが残念でなりません。もっとまとまった、連日した日数の支援の方が、実際お役に立てたのではと悔やまれます。

今回、この事業に参加し、他では得られない貴重な体験をすることができました。これからもこういった機会を提供していただき、またぜひお手伝いさせていただきたいと強く希望いたします。本当にどうもありがとうございました。

東松島市健康支援調査に参加して

泉病院付属一丁目クリニック介護支援センター 石沢 みさ子

たまたま、虹の丘地域包括支援センターの黒井さんに声をかけていただき、5月19日東松島市の健康支援調査に参加する機会を得た。二人で、早朝車で現地に向かったが、渋滞につかまり多少遅れてしまった。災害支援と書かれた車が多く、車中からの風景も、津波による瓦礫や壊れた大きな建物など、まさに被災地であった。

市職員よりレクチャーを受け、午前と午後に数十件の浸水地域と言われる地域に調査に入った。浸水したとはいえ、自宅は残っており、津波で流された親戚が身を寄せて、急に大所帯となっている家が多かった。平日ということもあり、不在の家も多く、家に居たのは、高齢者もしくは主婦と幼い子供。高齢者は体調の不調を、幼い子供を抱えた主婦からは、子供の赤ちゃん返りなどがでていることを聞き取った。この調査を元に、市が対応策を検討することとなるのか？

健康調査に参加して感じた事を一つあげると、私自身も自宅が震災し、不安という重石がどこかにある。そんな私にできることがあるとすれば、相談援助という業務の中で、相手に寄り添い話を聞くこと。そんなふうに思っている。

東松島市「健康支援調査」に参加して

岩切地域包括支援センター 上邨 まゆみ

5月16日（月）宮城県ケアマネジャー協会の声かけを受け、東松島市の健康支援調査に参加させていただきました。

3月11日の震災で、実家のある石巻は壊滅的な被害を受け、実家は基礎ばかり残す無惨な姿となりました。幸い 祖母、両親、弟、叔母夫婦、従兄弟達の無事は確認されましたが、避難所での生活は、報道で見聞きする以上に辛く厳しいものでした。そんな中で県外からの支援チームが、避難所生活を送る方々に医療支援を行い、皆さんの心の拠り所になっているのを目の当たりにし「自分にもできる事はないのか？」「何ができるのか？」と悶々とした日々を過ごしていた私は、少しでも、津波被害を受けた方々の気持ちに寄り添う事ができるのではないかと自身も被災者でありながら、被災者支援を行っている地域包括支援センターの方々の手助けになれば...という思いで参加しました。

道路一つで津波被害を免れた地域と河川の増水で床上浸水した地区、世帯毎住基ネットを参照に訪問させていただき、震災前と震災後の生活状況の変化を聞き取りました。『これから娘家族の遺体がくるので時間がない』といいながらも看護師である事がわかると、持病

の悩み、病院の開業状況等相談してくる方、『デイサービスから帰宅した後、利用していた施設が津波被害にあったが、職員や他利用者さんの安否は（怖くて）2ヵ月経っても確認できていない』と話す方、ヘドロのかき出しをしながら、なんとか自宅で生活できるようになったと話すご夫婦は、『朝、出勤した長男が会社で津波被害に遭い無言の帰宅をした。まだ現実が受け止められずに、スーパーでは息子の好物を手にとってしまう...深く考えないようするために、一生懸命ヘドロをかき出している』と涙ながらに話してくださいました。インテークで信頼関係も築けないまま、溢れ出る被災状況や胸の内をどのように受け止めていいのか戸惑いながら、それでも聞き取り調査からスクリーニングし、今後の支援の必要性や緊急度を判断し保健師に報告する。訪問開始直後には、任務の重要性を痛感し、生半可な気持ちで参加した事を反省しましたが、他所から来た私たちに積極的に協力し、労ってくれる方々を、非日常の生活から日常の生活の継続へ繋げるためにも、今回の戸別訪問と継続支援の必要性を痛感し「それでも前を向いて生きる姿」に逆にパワーを頂きました。

災害ボランティアを経験して

ジェイエイ仙南柴田介護支援センター 河本 信幸

災害から二ヶ月経過し公共施設、一般商店も落ち着きを取り戻している様に思えたが住民の自宅はとても住める状態では無かったが一生懸命、自宅内の泥をかきだしたり掃除を行っておりました。一人の女性でしたが、災害後に住む所も無く夫婦で自宅近くの畑の倉庫に住んでいると言う人がいました。話を聞くと避難所には行きたくないので倉庫で生活をしているとの事。血圧測定で上200以上、下100以上と健康調査のフローチャートで受診推薦、保健指導、医療班要請の事項に当てはまります。生活状況を聞くと、災害前は止めていた煙草を吸い始めたり夜間眠れないとの事。ストレスも溜まり住めるかどうか分からない自宅を掃除して、これから何をしたら良いか分からないので、とにかく掃除を試みているとの事でした。一見元気そうに見える方でしたが、心情は複雑な物でした。この方は保健師の判断で医療班要請となりましたが、健康調査を行う中で先が見えない、この後どうしたら良いか分からない等の言葉が多く聞かれました。私が担当した人は私で良かったのだろうか良く聞き取れたらどうかと心配になります。

ボランティアを通して子供から高齢者までお話を聞く事が出来ましたが、目の前で同級生が流された、家の二階に逃げたが目の前を人が流されていった等、普段の生活からは想像出来ない事ばかりでした災害後二ヶ月、一見落ち着きを取り戻している様に見えましたが、落ち着き色々考える時間が出来た時の事が心配です。

最後にこのような経験をさせていただき、皆様に感謝しなければいけないと思いました。

東松島市・岩沼市健康調査ボランティア報告

仙台市国見地域包括支援センター 盛 直美

- ◆東松島市健康調査 平成 23 年 5 月 18 日、20 日 (在宅健康調査)
- ◆岩沼市健康調査 平成 23 年 6 月 13 日 (仮設住宅健康調査)
- 平成 23 年 7 月 14 日、15 日 (在宅健康調査)

上記の日程で宮城県ケアマネ協会より、健康調査のボランティアに参加させていただきました。

あの1000年に一度の大津波を引き起こした3月11日（金）14:46発生の東日本大震災より2ヶ月余り経過してから被災地に赴き健康調査という形で関わらせて頂いた事に感謝申し上げます。

東松島市も岩沼市も津波による浸水被害に遭った在宅で生活されている方々の、避難所から仮設住宅・自宅へ戻りその後の健康状態を聴き取りしました。事前に、市の担当保健師より説明を受け、担当区域の割り当ての地図と名簿片手に1件、1件訪問して歩くという地道な作業を行い、訪問先で被災された方々の話しを伺いながら改めて事の重大さを感じました。一番、苦労したことは土地勘がなく地図を把握するまでに時間を要したことでした。

どちらの地区の方々も突然の訪問にも関わらず、快く受け入れして下さい逆にこちら側が元気を貰ってることが多かったように思います。

担当保健師より「とにかく、ゆっくりと話しを聴いてきて下さい。」訪問してみてその通りと実感しました。

「津波の浸水被害」での住宅の損壊というところでは共通しておりますが、これまでの生活状況・価値観はそれぞれに違いがあり、個人個人の感情にも違いがある。時間の経過とともに課題はそれぞれに細分化してくるであろうと思います。

これからの関わりがまた重要になってくるのではないかと感じながら、1日でも早く日常を取り戻すことができるようお祈りしたいと思います。また、今後も出来る事があればどういふ形でも協力していきたいと思いました。

岩沼市の健康調査に参加して

アースサポート古川 高橋 由紀

前回、ボランティアの依頼があった際は事業所の都合などもあり、参加できなかったことが心残りでした。今回のご案内を見て、ぜひ何かのお役に立ちたいと思い応募いたしました。

実際に被災地を歩いて調査してみて感じたことは、とにかく残った人達は前向きに頑張っていくしかない、落ち込んでいる暇はないという思いでした。私は津波で床上浸水した地区を回らせていただいたのですが、皆さん自宅の修繕のため震災前より忙しくされるとの事でした。いろいろな不便や悲しみがありながらも、生活を立て直すため、片付けや掃除に追われる日々。幸い早急に介入が必要な要支援者はいらっしやいませんでしたが、どの家庭もいずれ疲れが出てくるのではないかと心配が残りました。期間をあけて再調査ができると良いかと感じました。

また、生活再建に向けて出費が多くなっている。金銭面での追加支援を早く決めてもらいたいとのご希望が数多く聞かれておりました。

ボランティアの進め方について、行政やJOCAの方は連日説明しているからかもしれませんが、オリエンテーションでの説明が少なく、出発直前に訪問先のリストを配られる状況でした。私の意識や想像力が低かったと反省もしましたが、あらかじめ訪問先と地図の

チェックをする時間や、こうするといいよという申し送りがあると、効率的に調査が進められたのではないかと思います。

岩沼市健康調査に参加して

中嶋ケアプランセンター 荻野 知美

このたびの3月11日発生の東日本大震災で甚大な被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

私どもの事業所は仙台市宮城野区東仙台にあります。震災発生時は事務所内におり、大きな揺れに必死で近くのものに掴まっていました。事務所内には物が散乱し、電気はストップ。取り急ぎ事務所の外に避難したときには、足の震えがおさまらず、座り込んでしまうほどでした。震災発生後より、電話回線も寸断され、またガソリン不足が続いていたため、各利用者様の自宅を徒歩、自転車などでまわり安否確認を行ないました。電気、ガス、水道などのライフラインの供給が停止した状況の中でも通常通りサービスを提供していた他事業所の皆様には本当に感謝いたしております。

今回の震災で沿岸地域では大津波で甚大な被害を受け、同じ宮城県内に住む者として大変心を痛めておりました。また微力ながらも何か出来ることはないかと考えておりましたので、震災発生後、3ヶ月経過した6月、7月と岩沼市の健康調査のボランティアに参加させていただきました。各家庭を訪問し、震災発生時の被災状況、生活面での変化、震災前後の体調面、精神面での変化などを世帯全員分聞き取り、支援の必要性について検討し、保健師さんに報告を行うというものでした。

6月半ばに調査のため訪問した先は6月初めより入居された仮設住宅にお住まいの方々でした。訪問した住宅はもともと住んでいた地域は海が目の前の地域で、自宅は津波の被害を受け、居住継続が困難とのこと。訪問した際は不在世帯も多く、聞き取りができた方は殆どが65歳以上の方でした。長い避難所生活で身体機能が低下しているようにお話しされるかたもいらっしゃいました。また、ようやく仮設住宅に入居し、生活を始めていく中で今はまだ体調の変化は少なくともこれから色々な変化が出てくるのではないかと心配も感じました。

7月に訪問した先は、新築の家でまだ若い世帯が多い新興住宅地でした。1m弱の浸水があったとのこと。ここでは小さいお子さんがいるお母さんがたに多くお話をお伺いし、まだ言葉もたどたどしい小さいお子さんが震災発生時の津波の状況、震災発生後の生活の状況を話す姿には胸が締め付けられる思いでした。

今回の震災では物理的被害のみならず、身体的、精神的にも大きな被害を残しました。また、未だに続く余震、そのたびによみがえる津波の恐怖、また原発の問題、そしてこれからの生活のことなど震災から4ヶ月経過した今でも不安は大きいです。

専門職として何ができるのか、何をしたらよいのかを考えることが多い日々ですが、身近で出来ることを確実に且つ誠実に行なうこと、また、被害の大きかった地域の方々に1日でも早く穏やかな生活が訪れますようにと願っております。

頑張ろう、宮城！！

【被災地における仮設住宅での健康調査～雑感～】

医療法人社団東北福祉会 加藤 誠

岩沼市の被災状況等の予備知識が無く調査に入った。仮設住宅での健康調査を実施してみてもの第一印象としては、言うに及ばず「まだまだこれから」という物だった。

まず、入居間もない被災者に対して聞き取りを行った事も相まってか、困り事や健康上の不安を聞いてもなかなか聞き出せなかった。これは、入居者自身が転居間もなく、未だ避難所からのギャップを受け止めている時期であった為、具体的なイメージが持てていなかった事、やっと確保できたプライベート空間に対して、様々な調査等の訪問が続いている事、引っ越しによる荷物の取りまとめで忙しい事・・・等々が予想される。

その中でも私が聞き取りした世帯から聞かれた「不安」については、1.経済的不安 2.健康上の不安 3.今後の展望 4.環境について であった様に思う。1.については、高齢ながら就労の場があり、なんとか世帯としての収入は確保できそうだが、健康上いつまでこの環境で耐えられるのかが不安であるという物。2.については、先日救急搬送され、戻っては来たが、いつ自分の体に何が起こるか不安であるとの事。3.は、住み慣れた地区に戻りたいが、経済上戻れない。また、危険地域になり戻れない。息子たちも被災しているので迷惑はかけられない。という訴えであった。4.については仮設住宅の作りやスロープの設置位置についての不満ととれる内容であった。中でも、当然のことながら経済状況等に触れられる事に嫌悪感を示す世帯や、訪問自体に拒否的な世帯もあり、聞き取り調査等については慎重に行うべきと実感したところである。

避難所に比べ仮設住宅入居者は、プライベートに立ち入られる事を敬遠している印象が強い。定期的な訪問、継続支援の必要性は高い。

岩沼市のボランティアに参加して

大河原町地域包括支援センター 菊池 智美

岩沼市でのボランティアの内容は、仮設住宅入居者への健康調査でした。私が入った時、調査は終盤になっており、ほとんどの入居者の調査が済んでいたため、訪問戸数は多くありませんでした。岩沼市の担当の方から調査様式の説明や流れの説明を受けたあと、担当になった世帯の訪問を行いました。

ボランティアをして感じたことは、避難所での生活から仮設住宅での生活に移っていくなかで、仮設住宅から仕事にでかけたりデイサービスにでかけたりと、日常の生活に少しだけ近づいていたということです。「やるしかない」と言って前を向いている姿が印象的でした。また、中には震災にあって感じている辛い感情を吐き出していた方もいて、家族には話せない気持ちをボランティアには話せるという方もいたのかもしれませんが。被災者の気持ちに寄り添い、話したいことを話してもらい、その話を聴くことも大切な支援だと思いました。

私の町は津波の被害はないため、自分にできる支援をこれからもしていきたいと思いません。

岩沼市ボランティアに参加して

7月13日岩沼市林地区の健康調査に入らせていただきました。新しい家々が並ぶ町並みで、津波で床上浸水していた地域とは感じさせないとてもきれいな地区でした。住んでいらっしゃる方も皆さん30代とお若い世代の人が多く、日中仕事で不在な世帯もいらっしゃいましたが、子育て中のお母さん方から生活の中で感じている健康に対する不安を聴くことができました。みなさん快く調査を受けていただいて、事前に岩沼市が調査に対する市民への周知をされていたのだと感じました。

乳幼児のいるご家庭では、床下洗浄などを行ったのだけれど小さな虫が出たり、ダニのような細かい虫が自宅の中に出てきて刺されるのではないかと不安に感じている方や、自宅の片付けや泥の掃きだして腰や足が痛くて今頃になって疲れが出ていると話される老夫婦もいらっしゃいました。この老夫婦は、2年前に山形から岩沼に住む息子を頼りに引越して来たばかりで近くにどんな病院があるか、市の体制などが分からず不安を抱いていました。娘を頼りに福島県原発の避難区域に住んでいたお母様も日中の留守を任せられ「一人でいるといろいろなことを考えて眠れなくなる。近くにおしゃべりできる人がいればいいんだけど。」と話してくれました。健康のことだけでなく「家から見える海が怖いので土手はいつ作ってくれるのかしら?」「近くの道路、トラックがいっぱい走っているのが時々地鳴りに聞こえるの。」「陥没した道路は誰が直してくれるのかしら。」など、これからのことについての声も多く聞かれました。近くに公民館や中学校などがあるので、近隣住民の人同士が互いに話ができる場を設け、なおかつ行政の人を交えて一つずつ解決や解消をしていけたらもっと住みやすい岩沼になるのではないかと感じました。また、健康調査だけでなく、生活調査なども良いと思いますが、今後も定期的に市民一人ひとりの想いが聞けるような場面があるといいですね。

今回のような機会があり勉強になりました。地域住民の方が安心して元気に住めるようになることを願っています。

岩沼市のボランティアに参加して

介護老人保健施設丸森ロイヤルケアセンター 水沼 智和, 斎藤 学

7/15に岩沼市早股地区の健康調査のボランティアに参加させて頂きました。

私達がお伺いした時には瓦礫撤去、泥だし等住んでおりある程度環境が整いつつあるなかでした。

著しく体調を崩されている方はいませんでしたが精神的なストレスを感じて居る方が多く見受けられ今後の生活に対しての不安感が多く聞かれました。又、避難者登録していないから物資の援助は受けられないなぜ同じ被災者なのに物資の援助等受けられないのか行政に対しての憤りも多く聞かれました。地元地区でなかったのも住所録から訪問先を調べるのに時間がかかりスムーズに遂行出来なかったが地図に改めて訪問先が記されていればもう少し訪問を円滑に進められたと感じました。

女川町地域包括支援センターへのボランティア活動について

加美居宅介護支援事業所 大友 真澄

女川町地域包括支援センターが女川町社協に業務委託されるにあたり、社協職員への課題分析の方法、課題分析の手引きの利用の仕方等の支援でした。

ケース宅を同行訪問し情報収集し、実際の課題分析をしていく課程で気に留めていなかったことが、実は必要なニーズであったことに気づき、根拠をもった課題分析の大切さを再確認した次第です。被災地のボランティアという町民。被災者への支援という視点でずっと考えていました。現実には、職員やスタッフもまた被災者であり、支援が必要な状況であるということがわかりました。

日常ではない状況であるからこそ、専門性を持って支援をする必要があるのだと思います。また、重要な役割を果たす地域包括支援センターの職員の支援も、大切な私たちの役割であると感じました。

被災地（気仙沼）支援報告

みんなの家 畠山 幸博

県ケアマネ協会登米支部、社会福祉士会合同の被災地支援として気仙沼市の支援活動に参加しました。私が参加した活動は市落合保育所で運営されている福祉避難所の運営補助業務と避難所で開催した福祉相談会の相談業務でした。

初期相談による被災地状況や生活環境などの情報整理を行っていく中で、一次相談窓口として住民の状況やニーズの把握に留まり、地域資源に疎いことや、その後の経過に対して責任を負える立場でないため直接的な支援方法の提示などはできず、地元の行政機関に宿題のような形で一日の報告を上げることが心苦しくもありました。中長期的な支援を考えると現在住民が求めているものや課題を拾い上げる作業よりも、それを必要な関連機関に繋ぐ作業や、ケース毎に経過を追いかけて課題への対応について進捗状況の確認を行い、場合によっては支援方法の修正を行うなど、一時的な支援ではなく支援者側もある程度まとまった時間を確保して関われる体制が取れればと思いました。

今回のような災害規模では地元がある程度機能しながら外部からの支援を活用できることは限らないため、外部からの支援によって成り立つものと、被災状況に関わらず地元の資源に頼らざるを得ないものを整理することが必要だと思います。今回の震災によって失われた多くのものを思えば、少しでも多くのことをこれからの災害支援のあり方に活かしていくことができればと思いました。また、今回の支援活動では支部内だけではなく他の支部と連携して対応したところもあり、機能団体として広域的な交流が日頃から大切だと改めて感じました。

気仙沼地域へのボランティアについて

登米市中田・石越地域包括支援センター 三浦 勝

私は避難所や本吉総合支所での相談支援のボランティアを行いました。どちらも当然のごとく被災者を対象とした相談援助でしたので、緊張と不安を抱えながら現地に入りました。なぜなら、これまで私は震災などで、家・財産・家族を失ったという方の相談対応をしたことがなく、しかも気仙沼地域の社会資源や震災関連の制度の知識も不十分だったからです。実際に被災者とお会いした時は何と言って声をかけたらいいか迷いましたが、現

地スタッフの方々の協力もいただきながら、自然と相手の話を聞くことができました。もっとも心がけたのは、数多くの人から話を聞くことより、一人ひとりの話をしっかりと聞くことです。大震災による被災者への支援というのは、特別で非日常的な相談援助のような感じもしますが、そのような中でも大切なのは、傾聴や受容、共感といった相談援助の基本的な態度だと感じました。最後に忘れてはならないことは、地元の行政職員や事業所のスタッフの方々も被災者であるという視点です。

震災支援で思うこと

ふくし@JMI 加藤 美和子

3月11日の東日本大震災。沿岸部の被災状況を知った時、真っ先に心配になったのが今まで一緒に関わってきたケアマネジャーの方々の安否でした。電話もメールも繋がらず、確認をしたくてもどうすればいいのかわからないでいるうちに数日が過ぎ、3月17日にケアマネジャー協会のメンバーと一緒に被災地に足を運びました。東松島市・石巻市・女川町へ行き、数人のケアマネジャーに再会したり、会えなかった人の安否を確認したり…。実際被災した状況を目の当たりにした時には、画像で見た以上の状況で、数ヶ月前にみた光景との違いにショックと悲しみでいっぱいになりました。そして、心配で堪らなかったケアマネジャーに会えた時は、ただただ無事で良かったという想いで泣いて喜びました。と同時に、ケアマネジャーとして私たちにできることは何だろうか、何かできることをしたいという想いが更に強くなりました。

3月末に宮城県ケアマネジャー協会では、「ボランティア募集」を各支部へ要請し、支部ごとにとりまとめを行い、実際、気仙沼市・東松島市・岩沼市・女川町へ支援に入り、避難所運営及び課題分析や健康調査等の支援を行いました。各支部へボランティア登録をしていただいた方の中から都合のつく人の調整を各支部の担当者が行っていただきました。私も仙南支部や他の支部との調整に携わらせていただき、みなさん自分の仕事を調整しながら快く引き受けてくださったことと、実際行っていただいた後にお礼の電話をすると、「またこのような機会があったら是非声をかけてください。」と言っていただけることがとても有難く、嬉しく感じました。

また、私も実際東松島市や岩沼市・女川町の支援に入らせていただき、いろんな方との出会いや関わりがありました。被災者の方は様々な調査等が入っているいろんな聞き取りを受けている様子でしたが、様々な悩みや不安を抱え、いろんな想いがあり、できるだけ話を聞くことができたという想いで訪問させていただきました。

今回私が実感し、感動したことは、「人と人との繋がり」でした。震災があった時に安否を心配して浮かんだ人、その人やその地域のために何とかしたいという想い。そして、その人や地域を支援するために動き出した宮城県ケアマネジャー協会と各支部のケアマネジャー。それぞれの支部から支援に入り、全て人と人との繋がりでも動いており、宮城県ケアマネジャー協会や各支部がこれまで行ってきた活動がこれだけの繋がりとなっていることを実感しました。先日、被災した地域の方が「少しでも恩返しができたら」と話して、別の被災した地域にボランティアで参加していただきました。今度は、そこの方が「自分に

も何かできることがあったら言ってください」と言ってくださり、今自分の地域が大変な状況の中でも、他の人のために何かをしたいという想いや、こうして更に人と人とが繋がっていくことに感動しました。今回の震災で更に、支部の繋がりでだけでなく、県全体の繋がり、人と人との繋がりが広がったのではいかかと感じています。

東日本大震災の現状報告

宮城県ケアマネジャー協会理事 内田 裕子

3月11日14時46分マグニチュード9.0の地震発生 その後想定外の大津波が襲来し当事業所のある若林区の海岸荒浜地区は壊滅的な状況となった。事業所の3階建てのビルは玄関やエレベーター付近が崩れ使用できなくなり現在非常階段を出入り口としている。

震災直後荒浜地区の利用者に訪問していたスタッフから連絡が入り呼吸器装着の利用者を救急搬送する連絡をし、その後の対応をどうするか相談の連絡だった。家族にその後をお願いして至急戻るように指示し、私自身も海近くの岡田地区に訪問していたため、急いで戻る途中であった。途中、歩道のあちこちから噴水のように水が噴き出しているのが印象的だった。その時背後から津波が押し寄せていたが、そのことを私自身理解していなかった。幸い津波の難からは逃れることが出来た。

当日の夜は津波の影響で海近くの地区には近づくことが出来なく、ライフラインも寸断されていた。翌日は土曜日で前日確認できなかった利用者の安否確認を行い海岸地区の2人を除いてすべての利用者の安否が確認できた。

翌週の1週間は食料や水の調達が大変で手持ちの食料や紙おむつを不足している利用者に配ったり、電動ベッドのトラブルに対応したり、体調変化の利用者を病院に搬送した。

3月27日にケアマネジャー協会の人たちと県北の海岸沿いを北上しながら訪問した。津波の爪後は想像を絶するものだった。東松島健康センターを訪ねると地域包括センターの方々が泊まり込みで活動を行っていた。津波で車ごと流されかけて九死に一生を得た方も休まず仕事を行っていた。その活動ぶりに何か不思議なエネルギーを感じた。石巻市に入ると道路はがれきの間をやっと車が通れるぐらいであった。このがれきの間はまだ行方不明者が大勢居ることを思い胸が苦しくなった。そこから女川までの道路は海面すれすれの所もあり右側の海辺はもちろん左側の山の斜面も津波ですっかり何もなくなっていた。どれほど高い津波だったのか 女川の街は丘の上の町立病院から見下ろすと家の土台のみが残っているだけで、点々と残ったビルにはその屋上に車が引っかかっていた。町立病院の駐車場にも津波が押し寄せていて、流されてきた多くの車の中には消防車もありガードレールに乗り上げていた。ここでも地域包括支援センターの方々やケアマネジャーが頑張っ

て活動していた。石巻赤十字病院は震災の緊急病院として多くの支援部隊と共に活動していた。そこには津波で被災した医療者たちも支援者として協力していた。南三陸町の避難所になっていた学校でもケアマネジャーが避難所暮らしをしながら活動していた。

この日は気仙沼まで行ってきたがどこまでも何もない海岸線が続き津波の猛威を感じた。

しかし、被災地のケアマネジャーたちは被災直後からすぐに活動を始めており地域に存在感を示していた。

宮城県ケアマネジャー協会，社会福祉士会 災害支援状況

H23年 8月 1日現在

地 域	内 容	月 日	人 数
東松島市	総合相談	3月30日(水)	3名
亘理町	総合相談 (福祉避難所)	4月5日(火)	2名
気仙沼市	避難所運営 課題分析	4月9日(土)～7月16日(土) 25日間	66名
石巻市 (雄勝・北上)	ニーズ調査	5月2日(月)～継続中 65日間	130名
東松島市	健康調査	5月5日(木)～5月31日(火) 26日間	57名
岩沼市	健康調査	5月16日(月)～7月19日(火) 15日間	63名
石巻市	外出支援	5月19日(木)～7月26日(火) 10日間	20名
女川町	包括支援セン ター支援 課題分析	6月1日(水)～6月17日(金) 12日間	26名
石巻市桃生	総合相談(準福 祉避難所)	6月2日(木)～6月16日(木) 12日間	32名

亘理町	総合相談 (仮設住宅)	6月25日(土)～7月24日(日) 5日間	43名
計		172日間	442名

宮城県ケアマネジャー協会登録ボランティア数 119人(7月1日現在)

～被災地高齢者 外出支援～

- 第1回 平成23年5月19日(木) 担当 小湊・清野
 集合場所 雄勝町大須字大須(大須灯台近く) 参加者 5名
 上品の里 ふたごの湯
- 第2回 平成23年5月26日(木) 担当 庄子泰央氏・清野
 集合場所 雄勝町名振字中44 満照寺 参加者 6名
 上品の里 ふたごの湯 レストランでバイキング 飯野川のダイソー
 薬局で買い物
- 第3回 平成23年6月3日(金) 担当 早坂・清野
 集合場所 雄勝町大須小学校 参加者 6名
 上品の里 ふたごの湯 上品の郷で買い物
- 第4回 平成23年6月10日(金) 担当 佐藤(敏)・清野
 集合場所 雄勝町羽坂 参加者 6名
 上品の郷 ふたごの湯 上品の郷で買い物
- 第5回 平成23年6月17日(金) 担当 島さん・清野
 集合場所 雄勝町羽坂 参加者 6名
 上品の郷 ふたごの湯 上品の郷で買い物
- 第6回 平成23年6月24日(金) 担当 中山陽平氏・清野
 集合場所 雄勝字中倉8-3 ポンプ小屋 参加者 6名
 上品の郷 ふたごの湯 上品の郷で買い物 飯野川ウジェスーパー
- 第7回 平成23年7月1日(金) 担当 鈴木(み)・清野
 集合場所 雄勝町大須字大須 参加者 5名
 上品の郷 ふたごの湯 上品の郷で買い物 飯野川
- 第8回 平成23年7月12日(火) 担当 小湊・清野
 集合場所 北上町 にっこりサンパーク 参加者 4名 合流1名 計5名
 石巻へ扇風機探し 上品の郷 ふたごの湯 飯野川フジヤ等
- 第9回 平成23年7月19日(火) 担当 高倉しゅん・清野

集合場所 北上町 にっこりサンパーク仮設集会所 参加者 6名
上品の郷 ふたごの湯 上品の郷で買い物

第10回 平成23年7月26日(火) 担当 早坂・清野

集合場所 飯野川高校 仮設住宅集会所
松島芭蕉いやしの湯

～これからも続く